

ってしまった。
グッバイ理性、こんにちは本当の俺。

拗ねて向こうを向いている美希を後ろから、両手を回して抱き寄せる。

「あ……」

「冗談だよ、こんなに可愛い美希を一人残して向こうになんて行くわけないだろ？」

「……むー、ばか」

後ろから抱き寄せたまま、ゆっくりと唇を重ねる。

唾液の絡み合う淫靡な音が静かな部屋の中に響く。

舌を美希の口の中に滑り込ませると、美希の暖かさが口元から直接伝わってくる。

唇の柔らかさと暖かさが心地よくて、しばらく舌と舌を絡ませていると、ふはっ、と美希が声をあげた。

「ちよっと苦しい、かも」

「そっか、ごめんごめん」

「……それ、千早が聞いたら本気で怒りそうだな」

「……ハニーは、美希の胸って可愛くないと思う？」

美希は不安そうに言う。いったい何を仰っているのだろうか、この娘は。

「いや、すごく可愛いよ」

ブラジャーの上から胸を優しく揉み始める。胸の上部の肌が露出している部分に手が触れるたびに、美希の口から長いため息のような吐息が漏れるので、そのままフロントホックを外して、ブラジャーを脱がせた。

あっ、と美希が声をあげる間もなく、ありのままの乳房が姿を現す。美希の薄い色をした乳首がすでに半起ちになっているのを見て、俺の股間も硬くなっていくのが自分でわかった。

「……あああ、ふうう、くっ、……はあああ」

後ろから抱きしめるような格好のまま、服やブラジャーの上からではなく直接胸を揉み始めると、とたんに美希の声が大きくなった。乳房を優しく揉みほくした後、そっと手を動かして、指の間で乳首をつまむ

唇を離すと、唾液が糸をひいて、切れる。美希の口元に垂れた唾液を舐めるようにして、舌を這わせ、徐々に首すじへと下っていく。首すじに舌を這わせつつ、服の上から美希の胸に触れる。両手に収まりきれないそれを、両手で、円を描くようにして撫でると、美希は小さな吐息を漏らした。

「胸……感じる？」

美希は、小さく頷く。

それじゃあ、と、手を徐々に脇腹へと下げていき、するりと服の中に手を入れる。手が肌に触れると、ピクッと、美希は体を震わせる。パンザイをさせるように両手を上にあげて、緑のキャミソールを脱がせると、ピンクのブラジャーをつけただけの美希の上半身が現れる。

「見慣れていると思っていただけ……、やっぱり大きな、胸」

「でも大きいと可愛くないでしょ？ 千早さんみたいにスレンダーな方がいいのかな、って思うときもあるよ」

ようにして挟み込む。

「ッ……」

声を上げずに背筋を張る美希。指の間で擦ったり、手のひらで転がすように乳首をもてあそぶと、その都度ピクンピクンと全身を震わせる。最初のうちは声を出さないように我慢していたようだったが、くるりと正面を向き、舌と唇で乳首を愛撫し始めると、

「舐めちゃ、あっ、乳首は、だ、だめえ……だめなの、はああ、やつ、ふうう、お、お願い、だ、から、や、やめ……」

限界を通りこした美希は体を震わせながら、乳首を舐めないで、という声にならない声をあげる。だが、俺はそれを無視してひたすら乳首を攻めた。左右の乳首がその存在を自己主張するようになった頃には、すっかり息を荒くして胸を上下にあげさせていた。

「美希……、乳首、起ってるぞ」

「そ……、そんなこと、ない、もん」

「気持ち……よかった？」

「……うん」